

Fujimori - World

自然素材と銅の融合で広がっていく

建築家・建築史家

藤森照信の世界

「第三十四回 日本銅センター賞」を受賞された建築家・建築史家／藤森照信氏。自然素材を巧みに活かした建築作品は、実に個性的・独創的である。その作品が放つ圧倒的な存在感は、どこから来るのだろうか。

二〇〇七年二月十六日、新宿のリビングセンターOZONEで開催された、OZONEプロフェッショナルセミナー「藤森照信流 建築に生きる銅」より講演内容の一部をピックアップ。藤森氏の作品を拝見しながら、皆様を藤森ワールドへご招待したい。

Voice

【藤森照信流 建築に生きる銅】

OZONEプロフェッショナルセミナー
／日本銅センター賞受賞作品より

建築で大切なもの、それは「仕上げ」。

建築で一番大切なものは何かと問われれば、大半の建築家は、平面とか構造、あるいは発想と、答えるのではないでしょうか。私の場合は、少し違ってきます。私は、小さな声で「仕上げ」と、答えるようにしています。

銅板は、「自然素材との相性」が良い。

銅板とのつきあいは長くなりますが、はじめて中心的な仕上げ材として使ったのは「不東庵工房」ですね。以後、様々な作品に愛用し続けています。そもそもは自然素材と合う工業製品を求めて、試行錯誤を繰り返していた時にたどり着いたのが、銅板でした。「手に応答できること」「風化が美しいこと」。この二つが自然素材と似ているので、気に入っています。

藤森氏の設計される銅板を用いた外装・屋根は、銅のもつ耐久性と経年変化によって自然と調和し、建築全体に金属でありながら、温もりのある雰囲気と風格をもたらしている。

また藤森氏は、建築素材としての銅の新しい魅力を、様々な形で引き出すことに成功されている。銅の金属特性と他素材との相性などを細かく研究され、建築物の中に見事に活かされている。藤森氏ならではのこだわりが随所にちりばめられた作品たちを、じっくりとご堪能いただきたい。



不東庵工房





ねむの木こども美術館

●2007年 竣工
●静岡県掛川市

ねむの木学園は、心身の障害児童の施設であり、その生徒の絵画を展示するのが、この美術館である。「マンモス」を模した屋根は、銅板により素材感を巧みに表現。てっぺんを芝棟としている。



ラムネ温泉館

●2005年 竣工
●大分県竹田市

杉板の表面を焼いて仕上げた自然素材と手もみ銅板の屋根が見事に融合。そのたたずまいは、大分の田舎町の温泉宿の穏やかな風景と、実にやわらかく溶け合っている。

その他の建築作品

タンポポハウス

●1995年 竣工

ニラハウス

●1997年 竣工

一本松ハウス

●1997年 竣工

秋野不矩美術館

●1997年 竣工

ツバキ城

●2000年 竣工

一夜亭

●2003年 竣工

茶室 徹 ●2006年 竣工



高過庵 ●2004年 竣工



不東庵工房

●2001年 竣工
●神奈川県足柄下郡湯河原町

元首相・細川氏の別荘。藤森氏が銅板を初めて表現の主役として使った作品である。大胆かつ繊細に銅板を外壁に使用し、まさに銅の魅力をあますことなく表現している。



藤森 照信

—ふじもり てるのぶ—

Profile

建築家・建築史家・東京大学教授・工学博士。
1946年長野県生まれ。専門の建築史の他、「路上観察学会」の活動でも知られる。建築作品は1997年「赤瀬川原平氏邸（ニラ・ハウス）」で日本芸術大賞、2001年「熊本県立農業大学校学生寮」で日本建築学会作品賞を受賞。主な著書は「明治の東京計画」（岩波書店）、「建築探偵の冒険 東京篇」（筑摩書房）、「藤森照信の特選美術館三昧」（TOTO出版）、他多数。

「手もみ銅板」は、「高過庵」を設計した時、屋根を茅葺きや杉皮葺きのように毛深く仕上げたいと思い、手で凹凸を付けるように、銅板をもんでみたのがはじまりでした。また、平板の裾を折る「銅板裾折り」は、銅板張りに陰影を付けるために「ラムネ温泉館」ではじめて試みしました。以来、この二つの手法を、私は愛用し続けています。

仕上げへのこだわり「手もみ」「裾折り」。